

調查報告

I 調査概要

平成 29 年（2017）9 月、志波彦神社鹽竈神社より勝画楼建物の譲渡を受けた塩竈市では、その文化財的価値を確認するため、平成 29 年度・同 30 年度に以下の調査を実施した。本書では、これらの調査成果に、その後得られた新たな知見を加味して報告する。

1 平成 29 年度「旧法蓮寺勝画楼および広間（旧客殿御成ノ間）記録資料作成調査」

- (1) 調査期間 平成 29 年 3 月～9 月
- (2) 調査メンバー 株式会社伝統建築研究所
東北工業大学教授 大沼正寛
東北工業大学講師 中村琢巳
- (3) 内 容

①痕跡調査 ②主要部材調査・調書作成¹⁾ ③歴史的考察・建物所見作成 ④各種図面作成

註 1)：この調査を行った時点では、勝画楼の解体が検討されており、移築や解体保存も視野に入れた部材調査・記録保存・調書作成を行っている。

2 平成 30 年度「勝画楼詳細調査」

- (1) 調査期間 平成 30 年 5 月～8 月
- (2) 調査メンバー 株式会社伝統建築研究所
東北工業大学教授 大沼正寛
東北工業大学講師 中村琢巳
- (3) 調査協力 鹽竈神社博物館学芸員 茂木裕樹
- (4) 内容

①痕跡調査 ②北側建物記録保存調査
③資料調査・歴史的考察 ④各種図面作成

なお、「勝画楼」という呼称は、建物全体を一体のものとして呼ぶ場合と、東向書院部分のみを指す場合があるが、本稿では建物を一体として「勝画楼」、東向書院を「勝画楼棟」、西側の法蓮寺客殿（方丈）部分を「広間棟」、広間棟に取り付く向拝を「玄関」と呼称する（図 2）。



図 1 勝画楼全景

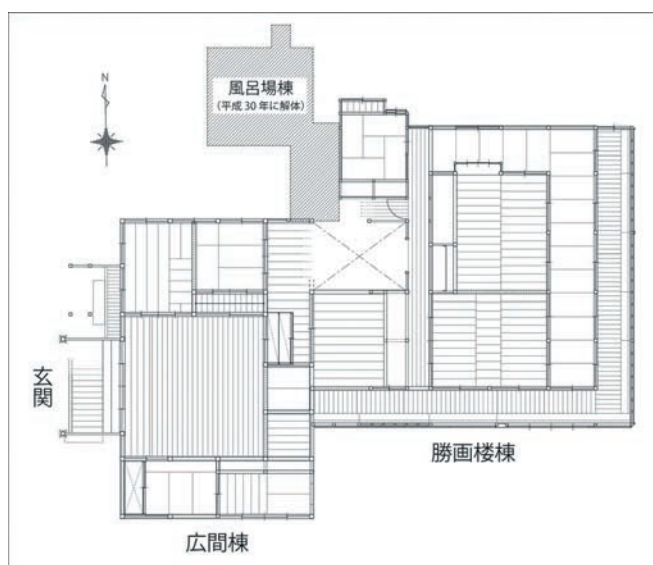


図 2 現況建物平面図

Ⅱ 勝画楼について

勝画楼は、鹽竈神社が鎮座する一森山東端に位置し、塩釜湾を一望する崖地にせり出す形で建てられた木造建築物である（図3）。

建物は2棟からなり、東側の書院は、崖地にせり出す形で柱を立てて床を高くする「懸けづくり」が残る県内唯一の遺構である。また、西側の広間は、鹽竈神社別当寺であった法蓮寺の客殿が前身であると考えられている。

藩政期、勝画楼は仙台藩主が鹽竈神社を参拝する際の御休所として使用されていた記録が残る。「勝画楼」の名称は、仙台藩第5代藩主伊達吉村公が「ここからの眺望は画に勝る」として「勝画楼」題字を揮毫したことに由来すると伝えられる（図4）。



図3 南東方向からの空撮画像
(手前が勝画楼、奥が志波彦神社鹽竈神社)



図4 勝画楼扁額 [鹽竈神社蔵]

法蓮寺は明治4年(1871)に廃寺となり、伽藍の大半が取り壊されたが、勝画楼は撤去を免れ、明治9年(1876)6月の天皇東北巡幸では行在所となった。

明治11年(1878)に公認の貸座敷業者であった藤元吉に払い下げられ、貸座敷として利用された。また、明治44年(1911)以降は藤から鈴木もとに貸し付けられ、割烹料亭「勝画楼」としての営業が始まり、多くの人々に愛された。与謝野鉄幹や鮎貝槐園、北原白秋などの文化人や、皇族、外国大使、GHQ幹部などが利用した記録が残る²⁾。

戦争末期から終戦後の営業不振により、昭和36年(1961)4月に鹽竈神社に譲渡された。以後神社が維持管理を行い、結婚式や披露宴の会場として利用されたが、昭和40年代前半を境に使われなくなり、急激に建物の老朽化が進んだ。以後、所有者や市民有志による維持管理の努力が続けられてきたが、平成23年(2011)の東北地方太平洋沖地震以降は倒壊を危ぶむ意見が強まったことから、一時は解体が検討されていた。平成29年(2017)、市民や有識者、議会などからの保存を願う声の高まりが追い風となり、塩竈市が建物の譲渡を受け、行政の手で勝画楼を保存していくことが決定した。塩竈市では、平成30年(2018)に建物の劣化や倒壊を防止するための応急修繕工事を実施するとともに、「勝画楼保存・活用検討委員会」を設置、外部有識者の助言を得ながら勝画楼の適切な保存・活用についての検討を開始した。

平成30年には日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の構成文化財に追加登録されるとともに、塩竈市有形文化財（建造物）に指定された。

註2)：『勝画楼の歴史』（齋藤・渡辺・小野 2017）には、明治から昭和にかけて勝画楼がどのように利用されたかが豊富な実例を挙げて紹介されている。法蓮寺の歴史や仙台藩の「御仮屋」に関する考察、勝画楼の保存に至る経緯なども、同書に詳しい。

Ⅲ 調査成果

1 解明要点

勝画楼は、年代の異なる2棟を接続した複合建造物であり、享保以前の築とみられる法蓮寺客殿に、18世紀中期に東向書院（勝画楼棟）が増築され、結果として千賀の浦（塩釜湾）の眺望が得られる最上位の空間として設えたものであり、さらに客殿部分を天保10年（1839）の法蓮寺火災以降のいずれかの時期に改修、近代以降にも様々な改変を加えられながら現在に至っていることが、先行調査³⁾を含む各種史料および現地痕跡調査から確かめられた。

なお、今回の調査で発見された痕跡の詳しい位置については図面にまとめて添付する（第22図、p.56）。

註3)：今回の調査に際し、以下の先行調査に多くを依った。

横山秀哉『鹽竈神社の建築』＜一森山叢書第1集＞（志波彦神社鹽竈神社社務所、1968）

佐藤巧『宮城県の古建築』＜宮城県文化財調査報告集第151集＞（宮城県教育委員会、1992）

以下、『鹽竈神社の建築』を『建築』、『宮城県の古建築』を『古建築』という。

2 建物の現状について

勝画楼棟・広間棟ともに、使用されなくなってから50年以上が経過しており、震災による土壁の崩落など、建物各所に痛みが見られる。特に、2棟の接続部分と、北側に増築された風呂場棟は腐朽が激しい。

一方、所有者や市民有志により屋根や排水関係の応急修理が施されていたため、小屋裏・床下も含め、建物軸部の保存状態は悪くなく、整備が可能な状態である（図5、6）。



図5 勝画楼棟の小屋裏の状況



図6 勝画楼棟の床下の状況